議員コラム

どうなる？ 新島の観光

小久保利佳

6月末に解散した新島観光協会。議会でも複数の議員が質問したが、今後の新島の観光について今一度考える局面にきている。

10月25日には産業観光課主催で「新島の観光2023を考える」と題した講演会が開かれた。鹿児島県沖永良部島で9年間観光協会の事務局長を勤め、島の観光を改革してきた古村英次郎氏を招き、講演、質問・意見交換会などが行われた。講演会には村の観光事業者や若者、議員も多く参加していたので、住民のみなさまにも共有し、今後の新島の観光について一緒に考える機会としていただきたい。

改めて観光とはなんだろう？

古村氏によると、沖永良部島はもともと農業の島で、観光産業は盛んでなかったという。そこを一から観光協会を立ちあげ、自走できる【稼げる組織】まで育てあげた講師の言葉は非常に説得力があった。特に講演の中で、「観光はさまざまな産業を繋ぐもので、観光だけではない島の総合戦略が必要である」という部分が重要に思えた。収入が見込める地域になれれば移住者も期待できる。観光は島の核である。

新島にとって必要なことは？

観光の方向性を聞く場所、話し合える場づくりとして、沖永良部島では戦略・方針の会議「テラスみらい会議」を年15回開催したという。また、たくさんのイベントを通じて、島民に対して島の観光の現状や情報を拡散したことが、観光産業を理解してもらうことに繋がったと古村氏。その結果、中高生、20代、若手、島の人も移住者も、島民一人一人が自分ごとと考えるようになったという。

そして古村氏は観光協会事務局長として、たくさんの人に頼ったとも話していた。新島でも観光事業者だけでなく、村全体のこととして、多くの人が観光について考えることが必要なのではないか？

地域のアイデンティティ

また同じく講演会に参加していた、北海道利尻島で遊びを通して島の魅力を伝える事業をしている室田雄飛氏の言葉も印象的だった。「観光の仕事は環境がないと成り立たない。観光業の人が環境を大切にする背中や地域課題の解決の過程を見せることで、観光客が自分の地域に戻ったときに生かせる学びを伝えている」という。

古村氏も地元で毎日ビーチクリーンを行なっているという。島の環境を大切にすることが、地域のアイデンティティを育むことにはならないだろうか？

新島で言えば、くさや、明日葉などの食文化、大自然・波と共存するアクティビティ、コーガ石に囲まれた暮らし、もやいの心、人の温もりなど、新島村でしか体験できないものがたくさんある。それを伝えることが、島を訪れた人の気づきとなり、島のファンやサポーターを増やすことになる。これからの観光には、そうした動きが不可欠ではないだろうか。

新しい組織づくりのための準備

10月31日の臨時議会で、地域活性化対策事業費として2百万円の補正予算審議があった。地域活性・振興のための人材として、「地域おこし協力隊」を募集する予算が計上され、議会にて可決された。

以前より議会からも「地域おこし協力隊」の導入について提案があった。観光事業はもちろん、定住人口促進のためでもあり期待がかかるところである。